

## 《特別報告》

## 中世存在論におけるプラトニズムと超越概念

山内 志朗

本論では中世哲学におけるプラトニズムという課題を受けとめ、それが中世哲学においてどのような論点を与えてくれるのか考えてみたい。そのために、13世紀の超越概念論の展開のうちに、プラトニズムがどのように及んでいるのかを考察する。中世のプラトニズムを語る場合には、プラトンの著作ばかりでなく、ラテン語に訳されたプラトン著作 (Latin Plato)、ネオプラトニズム、そしてイスラームでの継承を考える必要があるが、広大な研究領野が現れるが、アヴィセンナに由来する超越概念には、輻輳点とは言えないまでも、いくつかの論点が融合している。

中世においては、超越概念が形而上学の中心を構成しながらも、それはたぶんにアリストテレスのオルガノンの枠組みにおいて論じられていた。12世紀において超越的名辞 (nomina transcendentia) という用語が既に登場しているとはいえ、議論の枠組みはあくまで論理学である。超越的名辞は、あくまでカテゴリーを越えるもの、最普遍者ということであり、イデアの特性である超越性はほとんど見られない。そのように捉えれば、超越概念はプラトニズムとはそれほど深い関係を持ちそうには見えない。

しかし13世紀において、超越概念が成立する際には、屈曲した仕方ですらプラトニズムの論点が組み込まれてくる。13世紀から17世紀への超越概念論の発展を図式化した場合に、内容的に段階を分類できるように思われる。

- 1) 第一期：大学総長フィリップ、ヘールズのアレクサンデル、アルベルトゥス・マグヌス
- 2) 第二期：アヴィセンナ、ボナヴェントゥラ、トマス・アキナス
- 3) 第三期：ガンのヘンリクス、ドゥンス・スコトゥス
- 4) 第四期：オッカム以降、ヴォルフ学派まで、カント以前

この分類は一般的なものではなく、ドゥンス・スコトゥスにおける超越概念の大変革を中心にして考え、その起源とスコトゥス以降の変遷を辿るという視点を前提している。その点ではきわめて暫定的である。

さらに、第四期については、唯名論、イエズス会、スアレス、セミラミストなど、個別的に検討しなければならない流れがあり、一つに括れないが、それを見渡す研究は今後の課題であるので、一つにしておく。ともかくもスコトゥスに大きな切断があったことは事実であり、上記の分類を暫定的に用いる。

### 1. 超越概念の成立

超越概念の端緒は12世紀に遡るが、13世紀の存在論を巻き込む理論とは別個のものであり、やはり第一期となるのは、フィリップとアレクサンデルである。フィリップの超越概念論は『善についての大全』(1225/28)に展開されるが、そこでは、存在、一、真、善の四つが超越概念として提示されている。存在以外の三者が「存在に随伴する三つの条件 (tres conditiones concomitantes esse)」をなすと考えられ、既に「随伴」というアヴィセンナに由来する用語が登場していることは注目に値する。

フィリップにおいて、超越概念という枠組みは、形而上学の改革ということではなく、アルビジョア派のマニ教的悲観主義と戦うためであった。その時期において、超越概念の問題軸は〈存在〉と善にあったと言ってもよいだろう。

この時期の他の論者として、ヘールズのアレクサンデルが挙げられる。アレクサンデルの超越概念論には、ルッペラのヨハネスなどによる加筆ということもあり、扱いに注意は必要である。存在の第一の限定 (primae determinationes entis) が知性における第一の印象 (primae impressiones) であり、それが一、真、善であるとするなど、超越概念を四つに限定する際に、アウグスティヌス的な枠組みが強く働いている。存在の限定が三種類になることを、精神との関係で説明しているのである。事物の存在は精神と関係づけられ、記憶、知解、意志との関係で三重化されるというのである<sup>1)</sup>。

アレクサンデルにおいて、超越概念が存在を含めて四つであることは、体系の構成上重要であった。というのも、第二期において、「もの」や

1) cf. Alexander Halensis, *Summa Theologica*, Pars I. Inq. I. Tract. III. Quaest. I. 73

「或るもの」が加えられることは、別個の契機が導入されたことを意味するからである。

超越概念を四つとすることは、アルベルトゥスにおいても見られる。次の四つのもの、つまり存在、一、真、善は基体に即しては互換的であるが、語の意味に関して (secundum intentionem nominum) はそうではない。一、真、善は存在にいわば存在の様態を加えるにすぎない、とされている<sup>2)</sup>。超越概念の理論は、論理学の拡張ということにとどまらず、善を含む以上、目的因にも関わり、オルガノンを越えて、形而上学をも巻き込む枠組みとなるしかない。ここまでは第一期であり、アヴィセンナの影響も垣間見られるが、存在論への波及の程度はまだ部分的である。

## 2. 超越概念としての〈もの〉

第二期において、超越概念は大規模な改革と結びつくようになる。第二期にはアヴィセンナの存在論の受容という側面が強く表れてくる。存在、一、真、善の四つの超越概念とする時期を第一期とすると、第二期には、アヴィセンナの『形而上学』を踏まえて、存在、一、〈もの〉、或るものの四つか、真と善を加えて、六つが挙げられるようになる。クレモナのロランドは、存在、一、或るもの、「もの」の四つを挙げたとされ、トマス・アクィナス『真理論』は、六つの超越概念を挙げている<sup>3)</sup>。

第二期の特徴となるのが、この「もの」(res) 概念の導入である。なお、以下のところで、煩瑣ではあるが、アラビア語の shay' は〈もの〉、ラテン語の res は「もの」と訳し分けることにする。既に多くの研究者が指摘しているように、shay' は res と訳されたわけだが、両者の間に差異が存在しているからである。

「もの」概念は、西洋中世哲学でも扱いにくい概念だが、イスラーム哲学においても〈もの〉概念は難解である。〈もの〉概念の継承と受容には、大きな断絶が潜んでいる。その事情は最近になるまで注目されることはなかったが、1990年代以降、アヴィセンナにおける〈もの〉概念の特異性が解明されるようになり、イスラーム哲学における変遷と、それがどのように西洋中世の「もの」と異なるのか、明らかになってきた。イスラーム哲学においても、アヴィセンナを中心とした研究が進み、ムータジラ派と

2) Albertus, *Summa Theologiae*, tract. VI, Quaest. 28.

3) 或るもの (aliquid) は「もの」概念と重なるものと捉え、ここでは踏み込まない。

の関係のみならず、弟子であったバフマンヤルやイブン・カンムーナなどへの影響関係も研究が進み、〈もの〉概念がイスラームにおいても西洋中世においても、〈存在〉に匹敵する形而上学の中心概念となることが明らかになった。アヴィセンナにおいては、〈もの〉の方が〈存在〉よりも先なるものと捉えられる場合もあり、そこに独自の存在論——〈もの〉論——が形成されたのである<sup>4)</sup>。

アヴィセンナの〈もの〉概念はムータジラ派の理論を半ば保持するところがある。ムータジラ派の特殊な〈もの〉論は以下のような背景が考えられている。創造における「あれ！」という神の命令が向けられるものがあって、その命令の後に命令の対象が存在者へと転じたとされる。その神の命令が向けられるものが〈もの〉であり、それは無=非存在者 (al-ma'dūm) である。無も属性の基体となる。無も存在者も〈もの〉であり、可能な限りあらゆる属性を受容しうるものが〈もの〉なのである。そしてこの属性を受容する無ということは肉体の復活にも機能するのである。

いかなる属性を受容しうる基体としての無が〈もの〉と考えられたことは、ムータジラ派の存在論の特徴であり、アヴィセンナはその存在論を批判しようとした。ただその〈もの〉の特異性はアヴィセンナにも流入し、残存してしまった。

ただ、いずれにしても、存在者と非存在者の両者を含むものとしての〈もの〉という論点は、アヴィセンナから消えたとしても、〈もの〉が論理的に可能なものを含み、したがって、現実的な存在者よりも広く、存在者が可能的なものも現実的なものも両者を含む限り、外延が等しくなるということは強調されるべきであろう。だからこそ、〈もの〉が超越概念としてあり、基体に即して互換的なものとなりうる。

しかしこの〈もの〉が超越概念に組み込まれるのは、〈存在〉と基体に即して=外延的に等しいものが導入されたことにとどまるのではない。13世紀の西洋中世がアヴィセンナの論点を取り入れることは、超越概念の枠組みに大きな切断をもたらした。〈もの〉という語りがない概念には、注意すべき論点が含まれており、それは、アラビア語とラテン語の差異を踏まえ、そして同時に大きな理論の改変をも求めるものであったために、見

---

4) [Aertsen96] [Aertsen02] [Druart01] [Wisnovsky00] [Wisnovsky03] 参照。第一の基本的文献としては [Aertsen96] があるが、アヴィセンナにおける〈もの〉概念については、[Wisnovsky00] [Wisnovsky03] が有益であり、また十三世紀の超越概念へのアヴィセンナの影響を知る上では [Druart01] が特に重要である。

えにくくなってしまった。

ここで登場する〈もの〉は、扱いに注意の必要な概念である。話を端折ると、アヴィセンナにおいて、普遍は〈もの〉であり、この世に存在しない七角形の家も、フェニックスも〈もの〉なのである。これは、ラテン語の「もの」には当てはまらないことである。

当初、超越概念は四つであったが、或る時期から六つに増えた。そこに〈もの〉と〈或るもの〉が加わった。〈もの〉がアヴィセンナ『治癒の書』「形而上学」第1巻第2章や第5章を踏まえていることはほぼ確かである。そして、同時に便宜的な語源学に基づいて、res a reor-reris（仮想物としての「もの」）、res a ratitudine（根拠をもった「もの」）という用語も登場し、ボナヴェントゥラやトマス・アクィナスが使用している。これらの用語の由来は未だ十分には解明されていないが、アヴィセンナの〈もの〉と関連していることは確かである。

超越概念の数が増えるということは、単なる量的増加ではない。アレクサンデルにおいては、三位一体論と結びついて、超越概念が四である論拠を形成していたが、その数が六になることは、量的な増大のみならず、アヴィセンナの存在論をある程度受容しなければならないのである。

アヴィセンナの『治癒の書』「形而上学」の第1巻第5章には、「〈もの〉と〈存在〉と必然といったものは精神のうちに第一の印象によって直接的に刻印されると述べる（Dicemus igitur quod res et ens et necesse talia sunt quod statim imprimitur in anima prima impressione, ...）」とある<sup>5)</sup>。この箇所は、〈もの〉が超越概念の一つに組み込まれるようになった背景を示しており、また13世紀西洋スコラ哲学への影響から見ても、きわめて重要である。「〈存在〉と〈もの〉は第一の印象によって精神に刻印される」と記され、存在の先行性が言及され、存在の一義性をめぐる議論でも鍵となる一節である。そして、同時にここで〈もの〉の先行性も触れられている。このテーゼは超越概念の第二期にとって重要である。そしてこの〈もの〉の先行性こそ困難の中心である。

### 3. アフロディシアスの伝統

アヴィセンナの〈もの〉概念が、イスラーム思想の中でも独自であった。アヴィセンナの〈もの〉概念は、ギリシア哲学の *pragma* と結びつくので

5) Avicenna Latinus, *Metaphysica*, I 5, van Riet, I, p. 31.

はなく、むしろイスラーム哲学独自の存在論の中から現れたものであり、しかも西洋中世における「もの」(res)とも異なったものである。そして、西洋中世はアヴィセンナの〈もの〉概念を、伝統的な「もの」概念に接合したために、特殊な概念が立ち現れたのである。そして、それが超越概念発展の第二期を彩ることとなった。

アヴィセンナの〈もの〉概念は、イスラーム思想史の中で少なくとも二つの意義を有している。一つは、既に触れたことだが、ムータジラ派の存在論批判である。ムータジラ派は、原子論的な個体主義を主張し、〈もの〉としてあるのは、存在者と非存在者(al-'adam)であると考えている。存在するのは、真空と個物でしかないとする。この非存在者は「無」というようなものではない。復活の際にかつて有していた性質をすべて取り戻して、かつての状態を再現するものであり、復活論と結びついている。したがって、この非存在者は、西洋の非存在(non ens)と対応するものではない。

この非存在は〈もの〉であるというテーゼは批判の対象となったが、アヴィセンナもこの理論に正面から反対し、非存在者=真空は〈もの〉ではないこと、そして普遍が〈もの〉であると主張する。〈もの〉は、現実的なものと可能的なもの両方を包含し、肯定的言明が真なるものとして見出されるものであって、現実存在している必要はない。〈もの〉の方が〈存在〉に先行しているのであり、したがってまた〈存在〉の方が〈もの〉に随伴するもの(lāzim: concomitans)なのである。

しかしそれだけでは、resを導入する必要は必ずしも生じない。〈存在〉で十分であるように思われる。〈もの〉が導入される論拠を確認する必要がある。アヴィセンナにおける〈もの〉概念の特質は、それが、普遍論の中に「純粹本質・共通本性」という次元を導入したことである。一見奇妙なことだが、〈もの〉と純粹本質は重なるものである。この〈もの〉ということは、アフロディシアスのアレクサンドロスに由来し、アヴィセンナ、ドゥンス・スコトゥスと継承されながら、不思議にも適切な名称が与えられなかったものとも考えることもできる。その意味で「奇妙な存在者」なのである。同じ事態を表すことになるが、普遍は〈もの〉であると述べてもよい。そして、〈もの〉としての普遍こそ、「馬性は馬性に他ならない」という場合の馬性に対応するものであり、いわゆる「共通本性」に対応するものである。

アヴィセンナにおいては、一度も存在したことのない七角形の家やフェニックスが普遍であるとされる。そして月や太陽までも普遍なのである。

存在したことの無いものが普遍であるというのは、様相理論において充実性の原理 (the principle of plenitude) を廃棄していることばかりでなく、普遍は複数のものへの述語可能性として捉えられていることを示している。普遍を語る場合に設定されていた一と多の次元は、現実性の領野ではなく、可能性の領野において検討されているのである。

七角形の家やフェニックスが〈もの〉になるということは、西洋中世にとっては了解しにくいことだった。この点を理解するために考案された枠組みが *res a reor-reris* と *res a ratitudine* であると思われる。13 世紀半ばにおいてパリ大学では共通の理解が広がっていたようだが、この経緯を示すテキストは見つかっていない。

アヴィセンナの〈もの〉概念は、普遍論や存在偶有性論とも結びつくし、スコトウスの個体化論、存在一義性論などにも結びつき、実に広範な影響を及ぼしたが、ここで注目すべきなのは、範型論との結びつきであり、アウグスティヌス的な範型論とアヴィセンナの〈もの〉論を結びつけたところに、ヘンリクス存在論改革の意義が存在していた。

#### 4. 目的論と範型論

ムータジラ派においては、〈もの〉と〈存在〉の包含関係が、西洋中世では〈存在〉と「もの」と逆になっており、そしてそれが批判されながら基本的枠組みとして背後にとどまった。アヴィセンナにおいて、〈もの〉が七角形の家やフェニックスを含むことは、〈もの〉が可能性の領野も含むことであり、同時に範型論的目的論の枠組みと結びつくことはきわめて重要である。その際、アヴィセンナ『治癒の書』「形而上学」第 6 卷第 5 章で展開されながら、ラテン語訳における大きな誤訳と不完全な翻訳の結果、西洋中世の存在論に難渋を強いることとなった。

その箇所には、「目的因は〈もの〉性において、作用・受容原因に先行する (*causa finalis in causalitate praecedit causa agentes et recipientes*)」とある。この箇所は〈もの〉性 (*shay'iyya*) がラテン語の因果性 (*causalitas*) と訳されているところである。

目的は作用に先行する、ないし目的因は、他の原因の因果性の原因であるとされている。そして、目的因こそ、他の起成因の因果性の起成因であると述べられたりする。これはそれ自体では理解しにくい。

アラビア語原文とそのラテン語訳ではかなり大きな違いが出るので、原文を踏まえると次のようにある。「〈存在〉に至る点から考えると、目的は

結果よりも後なるものだが、〈もの〉性においては他の原因よりも先行する。具体的な個物においては、〈もの〉性と〈存在〉の間には差異がある。というのは、或るもの (al-manā) は具体的な個物のうちに〈存在〉を有し、精神のうちにも〈存在〉を有し、両者に共通なものとしてある。この共通なものが〈もの〉性である。目的は、〈もの〉であるかぎりにおいて、残りの原因に先行し、それらが原因である限りにおいて、原因の原因なのである。そして、具体的な個物のうちにあるかぎりにおいては、後にくる<sup>6)</sup>。

〈存在〉と〈もの〉において序列が逆転しており、純粹本質と〈もの〉—— *res a reor-reris*——が重なることを見えにくくしている。〈もの〉は、特殊な因果性、神の知性における範型因としてのあり方なのである。〈もの〉は、現実的な事物の範型であり、結果としての事物に先行する。しかし、それは制作者が完成を目指して心に抱くモデルと対応し、したがって目的因として先行するのである。

この範型論を担うのが〈もの〉の概念であり、〈存在〉の方がカテゴリーの枠組みに依拠するのは別個の枠組みを踏まえている。〈もの〉は目的因を前提し、創造や制作の場面で機能し、そしてそれがカテゴリーの枠組みの中で論じられる場合に問題となる。超越概念が、善や美という論理学に収まらない概念を含んでいたのだが、実はそれは一見すれば価値には無縁に見える〈もの〉にも妥当していたのである。〈もの〉は存在論的に中立なのではなく、善と同様に意志や創造・制作という場面で機能するのである。

この存在論的に中立ではない〈もの〉がラテン語に導入されて「もの」(*res*) 概念が登場した。この範型論と結びついた〈もの〉を自覚的に受容したのは、ガンのヘンリクスがほぼ最初とってよいと思われる。

「もの」の本質は二種類の仕方でも考察可能である。一方は、それ自体で (*in se*)、もう一方は、一つの基体のうちにあって、多くのものに多数化しているものとして (*in supposito uno et multiplicato in pluribus*) ある仕方である。同じように、神が被造物について持つアイデアも二種類のあり方を持つ。前者は絶対的な本質 (*essentia absoluta*) のアイデアとしてあるあり方で、後者は複数の基体へと関係づけられた本質 (*essentia relata ad supposita*) のアイデアとしてあるあり方である。前者の仕方によって、神の内

6) Avicenna, *Kitāb al-naǧāt*, p. 345, (Cairo, 1913) (quoted in [Wisnovsky03] p. 163)

なる被造物のアイデアは、ただ一つのアイデアとしてありながら、神はアイデアによって、本質の全潜在力 (*tota virtus essentiae*) を認識し、様々な基体によって可能な限りどのように多様化されるかということも認識する<sup>7)</sup>。

ここで、〈もの〉性は単独で捉えられた本質 (*natura absolute considerata*) と近いものとなる。ここでの要点は、目的因は、自然の事物においてあるかぎり、知性の外部で現実化する最後のものでありながら、目的因の本質はそれ自体で考えられる限り、先行し、起成因が何らかの結果を生み出すことを引き起こすように知性の中に存在しているのである。

このように、ヘンリクスにおいて、「もの」は二重化されたが、それはアヴィセンナの〈もの〉論を受容するためだったのである。

### 5. 超越概念の変容とプラトニズム

〈もの〉性は、西洋中世では、単独で捉えられた本質や共通本性として理解される場面もあったが、ヘンリクスにおいて典型的なように「もの」として捉えられる場合もあった。超越概念を考える場合、ドゥンス・スコトゥスが超越概念の変革に及ぼした寄与を考えなければならないが、その前の段階においても、アヴィセンナの存在論を受容した点において、ヘンリクスの意義はきわめて大きい。ヘンリクスの独自性と中世哲学への貢献については、*Opera Omnia* が刊行され始め、研究が進展するにつれますます顕著になっている。特にアヴィセンナのヘンリクスへの影響も説明が進んでいる。アヴィセンナの思想はかなりの部分がヘンリクス経由で西洋中世に入ったと言ってよいだろう。

ところで、アヴィセンナの立場はプラトニズムとは言いにくいとしても、ネオプラトニズムの流れは明確に受容している。アヴィセンナがプラトニズムではないという理解は、アイデアの超越性という論点がないからである。ヘンリクスの立場はどう捉えるべきなのか。

神における範型は、絶対的に考察された本質というあり方を有し、それがどうかとは無関係である。この「絶対的に考察された (*absolute considerata*)」という次元は、アヴィセンナにおいて登場したものであり、それがトマス・アクィナスなどを通じて、普及していった。この「純粋本質」の次元は、普遍としてみるとしても、存在論において捉えるとしても、判然としない。

7) Henricus, *Quodl.* II, q. 1, *Opera Omnia*, vol. VI, p. 4f.

アヴィセンナの議論においては、起成因と目的因との相互性が登場する場面において意味を有する。もちろん、この起成因と目的因との相互性・相互作用というのは、現代から見ると分かりにくい。起成因が時間軸において先行し、目的因が後続すると考える限り、奇妙である。神の知性における生成の秩序と考える途もあるが、しかしそれは必ずしも神学的な機制ではなく、起成因と目的因の相補性、フィードバックシステムを伝統的な枠組みで語ればそのように記述されるということではないのか。

13世紀のスコラ哲学において、「もの」について、豊かな哲学を構築したのが、ガンのヘンリクスである。既に見たように、アラビア語の〈もの〉と、ラテン語圏の「もの」の間には差異があり、訳語としても別々にせざるを得ない。

ヘンリクスは、アヴィセンナの『治癒の書』『形而上学』の〈もの〉に関する基本テキストを、丁寧に追跡し、それを自らの体系の中に組み込んでいる。その際、重要なのは、アヴィセンナの〈もの〉論を受容することだが、思想のイスラーム化や教父哲学の伝統からの乖離を意味するのではなく、アウグスティヌスへの回帰を含んでいたことは特徴的なことである。

ヘンリクスは、本質や存在を〈もの〉化したと非難されるべきではなくて、彼は「もの」概念を解き放ったのである。13世紀の「もの」概念については、アヴィセンナの〈もの〉概念を、スコラ哲学の枠組みに適合するように変容させながら、「もの」概念として受容したことになるのだが、そこで重要なのは、「もの」概念が拡大したということなのだ。そして、そのことと超越概念の枠組みの変質と、アウグスティヌスの範型論の展開とは軌を一にしていることなのである。res a reor-reris と res a ratitudine の概念対において、前者が仮想的なもので、後者が根拠のある事物であるが故に、後者の方に重要性を見出しがちである。

アヴィセンナにおいて、〈もの〉は可能性の領野を含むものとなった。非存在者＝無を〈もの〉から除外することは、〈もの〉を狭めるようにも見えるが、〈もの〉概念を組み替えることで、現実性に拘束されていた〈もの〉を可能性の領野にまで拡張したと捉える方がよい。

ヘンリクスにおいて、「もの」は二重化された。ここには「もの」概念の拡張が見られる。「もの」の二重化は、アヴィセンナの〈もの〉論の受容ということもあるが、そういった受動的なものにとどまらなかったように思われる。ヘンリクスは「もの」を関係と捉え、そこに一と多の媒介を設定した。「もの」はヘンリクスにおいて、範型論とも関係の形而上学と

も結びつき、その中心をなす。「もの」がそれ自体として捉えられるか、多数のものに適用されたものとして捉えるかで、一にも多にも分節するが、そのような関係 (respectus) としてのあり方を範型として神の知性のうちに設定したのである。

ドゥンス・スコトゥスはヘンリクス経由で純粹本質の枠組みを受容しながらも、ヘンリクスの「もの」概念や範型論は受容していない。それはおそらく神の知性のうちに範型という理論が、自然的認識の体系として神学を考えていたスコトゥスには受容できないものだったことによる。そして、アヴィセンナにおいて既に成立していた様相理論の改編を受容しながら、範型論は受容していないのである。アヴィセンナの存在論を存在一義性論として解釈する流れが13世紀には存在し、スコトゥスもその一人であり、スコトゥスの一義性論の源泉の一つとなっている。範型論はスコトゥスの立場からすればアナログア論になってしまうと考えたのかもしれない。スコトゥスは、アヴィセンナに由来する超越概念の変革を受容し、それを大幅に推し進める方向で自らの存在一義性論を立てた。「もの」論と一義性論との関連が問われるべきである。この範型論がプラトニズムの一片であると見るとき、そこにも中世哲学においてプラトニズムを探求する理路が現れてくるのではないだろうか。

## 6. 結 語

アヴィセンナはネオプラトニズムに染まったアリストテレス主義者である。アヴィセンナ研究者の中には、彼の〈もの〉論がプラトニズムに陥ってしまうのではないかと危惧する者もいる。ヘンリクスについても、その「もの」論や本質存在 (esse essentialis) の理論がプラトニズムの一種に陥らないことを述べている者もいる。ここで、アヴィセンナ、ヘンリクス、ドゥンス・スコトゥスがプラトニストであったのか、プラトニズムを継承しているのか問うことはほとんど意味がないだろう。

超越概念とプラトニズムの関係は薄い。そして中世哲学におけるプラトニズムという契機も少ない。にもかかわらず、アリストテレス的な枠組みが拡張されたり、そこにネオプラトニズムの流れが付加されるとき、それがプラトニズムのように映じる場合もあるということだ。アリストテレスを継承し、同時にそれを越えることが中世哲学の課題だったとすれば、至る所にプラトニズムの断片が見え隠れすると思われる。ここではその一片の駆動する力を垣間見た。

## 【参考文献】

- Aertsen, J. A. (1996), *Medieval Philosophy and the Transcendentals. The Case of Thomas Aquinas*, E. J. Brill. [Aertsen96]
- Aertsen, J. A. (2002), “‘RES’ as transcendental: Its introduction and significance,” in G. F. Vescovini (ed.), *Le probleme des transcendants du XIV au XVII siecle*, J. Vrin, [Aertsen02]
- Avicenna Latinus (1977–83), *Liber de philosophia prima sive scientia divina*, 3 vols, E. J. Brill.
- Avicenna (2005), *The Metaphysics of the Healing*. A parallel English-Arabic text ed. and tr. by Michael E. Marmura, Brigham Young UP.
- Druart, Therese-Anne (2001), “Shay’ or Res as Concomitant of ‘Being’ in Avicenna,” *Documenti e Studi sulla tradizione filosofica medievale*, XII. [Druart01]
- Henricus Gandavensis (1979–), *Opera Omnia*, editio Lovaniensis, Leuven (UP.)
- Wisnovsky, Robert (2000), “Notes on Avicenna’s concept of thingness (say’iyya),” *Arabic Sciences and Philosophy* vol. 10, pp. 181–221. [Wisnovsky00]
- Wisnovsky, Robert (2003), *Avicenna’s metaphysics in context*, Cornell UP, [Wisnovsky03]
- 加藤雅人 (1998) 『ガンのヘンリクスの哲学』 創文社